



# ハイライトよねやま156

## 1 寄付金速報 — 下半期の寄付状況は —

2月までの寄付金は前年同期と比べて2.7%増、約2,750万円の増加です。普通寄付金が2.0%増、特別寄付金が3.1%増となりました。先月から一転して、直近3年間の単月では最も低い寄付額でしたが、累計額でみると、10億5,600万円と1番高い寄付額のまま推移しています。

東日本大震災から丸2年が経ちました。復興の兆しは見られるものの、被災地では未だ厳しい環境が続いております。このような状況ではございますが、当会へのご支援も引き続き賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 2 ベトナム現地採用奨学生が感謝のスピーチ

2008年から3年間試行された「ベトナム現地採用奨学金」の最後の奨学生、ホ・ダン・ミ・アンさん（2010-13/川崎麻生RC）が、今春めでたく修士号を取得して卒業します。3月4日、当会学務・学友委員会でスピーチを行ったミ・アンさんは、留学生生活を振り返り「米山奨学生だからこそ、この3年間、一日も休まず緊張感を持ちつつ、勉強や交流などに力を尽くしました」と報告。「全国のロータリーの皆様のご寄付のおかげで、ずっと憧れていた日本留学の夢が実現できたことに感謝申し上げます。今後も交流を続けて、ベトナムと日本の懸け橋として頑張ります」と、感謝の言葉で締めくくりました。休職中の職場であるフエ外国語大学日本文化・日本語学科には4月から復職し、日本で学んだ最新の教授法で授業を行う予定で、同僚教員たちもミ・アンさんの帰りを心待ちにしているそうです。



採用当時の地区米山奨学委員長であり、カウンセラーも務めた鈴木憲治氏（川崎麻生RC）は、「無事に卒業を迎えることができ、安堵の気持ちで一杯です。論文の書き方から生活のことまで、日本に来て直面した課題の一つひとつを、彼女は相当の努力と周囲のサポートを得て成し遂げてきました。当クラブの会員にも親しまれ、昨年からはクラブ創立20周年記念事業として彼女の職場への支援も始めています。これからも成長を見守っていきます」と、喜びを語ってくれました。

## 3 東京米山友愛RCが創立3周年

国内で初めて米山学友を中心に設立されたロータリークラブ、東京米山友愛RC（第2750地区）が創立3周年を迎え、記念例会が2月16日に都内レストランで開催されました。和気あいあいとした雰囲気の中、当日のハイライトとして、「スーダン障害者教育支援の会」代表理事を務める米山学友、モハメド・オマル・アブディンさん（2005-08/東京国立白うめRC）が卓話



を行いました。アブディンさんには、東京米山友愛RCと台北客家RC（第3480地区）から共同で、スーダンの視覚障害児のために、点字盤80台が贈られました。

転勤や帰国により、子クラブの東京米山ロータリーEクラブ2750に移籍した会員もいるなど増減はありますが、現在も創立時を上回る29人の会員（うち米山学友は15人）がロータリー活動を楽しんでいます。

## 4

## 被災地に桜の植樹 — 第 2620 地区米山学友会 —



第 2620 地区（静岡県・山梨県）米山学友会が 2 月 10 日、岩手県・山田町で、復興への祈りをこめた桜の植樹を行いました。

東日本大震災で大きな被害を受けた山田町には、国内外ロータリークラブの支援で設置された「鎮魂と希望の鐘」があります。同学友会ではロータリアンの協力のもと、ここに早咲きの河津桜の苗木を 2 本植えました。

学友会長の上野佳子さん（中国 \*現在は帰化／2000-02／東京臨海東 R C）は、「被災地への奉仕活動を通じて平和の精神を学ぶことは、米山学友としての責務。毎年 3 月 11 日にはこの桜の花に人々が集い、鎮魂と安寧への祈りとともに手を結び合うシンボルとなれば嬉しい。私たちも必ず、この桜に会いに来ます」と、話しています。

同学友会はこのほか、第 2520 地区（岩手県・宮城県）米山学友会との交流をはかり、他の被災地を視察して帰路につきました。参加した学友からは「被災地の現状を情報発信したい。日々の幸せに感謝したい」「今後日々の生活の中で何ができるかを考え、実行したい」などの感想が寄せられました。

## 5

## 写真で子どもたちを元気に！ — シュン・プロジェクト —



映像作家として活躍する米山学友、<sup>パクヒョンジョン</sup>朴炫貞さん（韓国／2009-10／東京四谷 R C）が企画した「シュン・プロジェクト」が、第 2580 地区のロータリー財団新地区補助金を得て実現しました。

「シュン」とは、瞬間をとらえ、旬を見つけることで春を待ち望むという意味が込められています。このプロジェクトは、被災地の子どもたちにインスタントカメラを渡して撮影してもらい、現像された写真を発表したり、撮影したときの気持ちを考えてもらうものです。子どもたちには新たな発見・表現のきっかけとなり、写真を見る人々にとっては、東北の子どもたちの「今」を知り、生の声を聞くことにつながる活動です。

昨年、福島県相馬市の小学校で行ったワークショップでは、子どもたちが友達を撮影したり、笑顔で被写体を探す姿が多く見られました。朴さんは「子どもたちの夢で撮った写真を世界に発信し、私が感じた感動や楽しさを、より多くの人々に伝えたい」と、語ります。今後は福島県以外の場所でも、子ども対象のワークショップ、写真を鑑賞する大人対象のワークショップや展覧会など、さまざまな形で活動していきたいそうです。興味のある方は下記まで。

シュン・プロジェクトHP <http://www.shun-project.jp>

e メールアドレス [shunproject@gmail.com](mailto:shunproject@gmail.com)

